

認定されませんので、かつて認定を受けていた学科なら、今でもその時の学修支援の取り組みは生かされていると理解しています。

ここからは私に分かっているところになりますが、JABEE というのは技術者を育成する教育プログラムを「技術者に必要な知識と能力」、「社会の要求水準」などの観点から審査する、また「ワシントン協定などの考え」など、国際的水準に達した教育プログラムである、ということなのですが、つまり卒業生の質を保証する、保証できる教育プログラムになっているかということで、審査を受けて認定されるものになっています。認定プログラムの修了生は、国家資格である技術士の第一次試験を免除されますので、卒業生は建て前上このレベルをクリアしていないといけない、ということになっています。

認定基準は色々あります。まず基準1の「学習・教育到達目標の設定と公開」では、学生自身が学習の到達目標を理解し、それに向かって何をしなければいけないのか、主体的に理解した上で学習に取り組む、という仕組みにしないといけない、ということが書かれています。また基準2は「教育手段」で、カリキュラムの設計ですとか、色々な支援体制ですね、こういうものがいろいろあります。ただこのJABEEの認定基準というのは、これをしていたらOKという細かい条件が書いてある訳ではなくて、これらの基準をどういう仕組みでそれぞれクリアするか、それぞれ独自に考えてやらないといけないというものですので、我々としてはいつもこれで頭を悩ましているところです。続いて基準3「学習・教育到達目標の達成」、基準4「教育改善」とありまして、機関別認証評価と矛盾するものではなく、方向性としては同じものになっています。自分たちのやっていることを点検して、それで問題があれば次に改善してということを、ずっとやり続けたいといけない、ということを求められています。

細かいところでは色々あるんですが、こちらはJABEEの「学習・教育到達目標」の項目で（スライド14）、例えば「a.地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養」とあります。我々はこのプログラムで卒業生を出していますので、卒業生が全員、こういう能力を身に付けているということになる訳です。実態と

してどうなのか、なかなか難しいところはあるのですが、我々としてはこういう意識をもって学修支援に取り組んでいるということになっています。しかしなかなかうまくいかないことも多いので、日々悩んでいる状況です。

まとめ：工学部における学修支援

最後にまとめですが、本日私からは、工学部全体として行っている取り組みについて、その後で少し、学科独自の取り組みについて、私の所属する学科を中心にお話しさせていただきました。色々学生とかかわっているなかで、工学部では、工学部教務係と教員との間で、普段から連携しながら学生対応しておりまして、その点が私から見るとうまくいっている背景かなあと思っています。もちろんまだまだ改善点や課題はあるかと思いますが、やはり教員だけではなくて、工学部教務系のスタッフの方と協力しながら学生の学修支援を進めてゆくというのが大事なかと考えています。

以上です。ありがとうございました。

報告 4

農学部生命環境農学科における チューター制の運用

永松 大（農学部生命環境農学科・学科長）

失礼します。農学部の永松です。本日は「農学部生命環境農学科におけるチューター制の運用」というタイトルで話題提供させていただきます。

生命環境農学科の履修システム

まず生命環境農学科の履修システムについてご紹介します。生命環境農学科は定員 220 名という大きな組織で、1 年次には 220 名が同じカリキュラムで学習を進めてまいります。2 年次に上がるときに 4 つの教育コースに分かれることになっており、2 年次以降は 55 名程度のグループで専門教育を進めていきます。3 年後期以降は各研究室に所属しますので、各数名のグループで専門分野を深めていくという仕組みです。

生命環境農学科の学修支援

学部 4 年間に、どのように学修支援をしていくかと

ということですが、まずは各教育コースから1名ずつ、「学級教員」に出ています。1年次は220名を番号順に4つのクラスに分けて、それぞれ担当していただくこととしています。2年次になる時に、各コースに分かれますので、分属後のコース毎に、コースの学級教員がその学年の学生の支援をしつつ、4年まで持ち上がることにしています。

生命環境農学科では、これに加えて、学科教員の全員に「チューター教員」をお願いしていただき、教員当たり3-5名程度を受け持っていただく仕組みをとっています。1年次には学科長がチューター教員を指名し、2年次には、進級の時にコースが決まりますので、各コースでチューター教員を振り直していただいております。研究室に分属後は基本的に指導教員が指導しますが、生命環境農学科においては、研究室に所属しない場合もありますので、その場合はチューター教員の業務が継続することになります。学生から見ると、1年次に学級教員とチューター教員がおりますけれども、2年生に各教育コースに分属以降は、学級教員もチューター教員も変更になる可能性が高いということになります。学級教員とチューター教員はできるだけ別教員を当てるダブル・チューター制としています。

生命環境農学科のチューター制度

チューター制の目的は、学生との面談を通して、学修面をきめ細かく指導してもらいたいということです。生活面・健康面・経済面等に関して細かい指導をしていただく、それをもって学生をとりまく諸問題の早期発見や予防を目指したいというものです。主な役割としては、1年次の学生に対しては、農学部はクォーター制を導入していますので、各クォーターの履修登録期間に個人面談を実施して、学修面を中心にもろもろの相談を行う。成績公開後には、履修状況の確認と、指導もしてもらっています。2年次以降は各コースにて必要に応じて個人面談をする、それから3年後期以降も研究室に所属しない学生については、卒業までチューター業務を継続していただくことにしています。日常の業務としては欠席届の確認や、休学・退学・復学等の相談があった場合の窓口として機能してもらうことを想定しています。

チューター制の運用

チューター制の運用について、私が確認した範囲では、農学部では2005年から全面的にチューター制を運用しておりまして、20年の歴史があるということになります。加えて各科目の担当教員の方に履修している学生の出欠状況を、学務支援システムにできるだけ登録してもらうようお願いしていただき、チューター教員にはそれを見て担当学生の出欠状況を随時確認していただくようお願いしています。それによって不登校傾向などの諸問題をできるだけ早く見つけ出したい、ということをねらっています。

チューター教員の割り当て状況ですが、教授は5名、准教授・講師は4名、助教は3名の学生を担当する原則にしています。けれども昨今の教員数の減少によって、担当学生数は増えざるを得なくなっておりまして、教員の負担は増えております。我々は学部4年のなかでも、1年次の学生生活であるとか学習習慣というのが特に重要だと考えておりまして、1年生には定期的に面談をお願いしています。

1年生への面談内容

1年生の面談内容をご紹介します。各クォーターでそれぞれ少しずつ内容が違ってございまして、第1クォーターは4月の当初に面談をしていただくので、まず学部入学の満足度を聞いてもらう、そして履修登録の方法、登録の状況、生活状況や困りごと全般を聞いています。第2クォーターは、第1クォーター終わっての状況を確認めるとともに、第2クォーターの履修登録を忘れていた学生もいますので、その確認、それから全学共通科目の履修状況も確認しています。第3クォーターは前期の単位修得状況と、後期の履修登録について確認するとともに、夏休みを挟みますので、生活リズムの崩れについて確認いただいております。第4クォーターは、第3クォーターの状況と、1年次の終わりに待っているコース分属について、その希望に関する相談を受けています。

ここでは2024年度第3クォーターの面談状況についてをご紹介します（スライド6）。実施期間は今年の9月17日から10月15日まで、必ず聞いて欲しい項目を提示して、フォームで回答をもらっています。その面談結果を学科長が集約しています。面談できなかった場合

もその旨の報告をお願いしています。

1 年生面談結果 (2024 年 3Q)

1 枚だけですが (スライド 7)、面談結果の集計を紹介します。まず面談状況について、生命環境農学科 1 年生は 228 名おりますが、そのうち 218 名、96% の学生に対してこの時期に面談することができました。チューター教員の先生方には感謝申し上げます。それで、面談ができた学生について、生活、健康、メンタル面についてどうかという判断、評価をしていただいたところ、「A. 注意は必要ない」、「B. どちらかというと注意は必要ない」という学生が合わせて 208 名、全体の 95% となりました。スムーズに面談ができているという状況も含めて、ほとんどの学生は問題はなさそう、大丈夫だろうという評価をいただいております。ただし「C. どちらかというと注意が必要」、「D. 注意が必要である」という学生が 10 名、全体の 5% ございまして、そのくらいの数の学生は心配だということが集計されています。さらに、何度連絡しても返事が返ってこないというようなことで、面談ができなかった学生が 10 人、4% います。その学生についても、主に学務支援システムの内容から状況を報告してもらったところ、半数については大丈夫だろうという評価をいただいたのですが、残りの 5 人については注意が必要だという評価となりました。全体では 228 名のなかで 15 名に注意が必要だ、という把握が来ています。

チューター制の効果

チューター制は教員の負担が大きい訳ですが、効果について考えてみました。まず学生側から見た時の利点としては、新入学時に一人暮らしを始める場合が多い中で、当初の個人面談によって、入学当初の諸々の不安というのを軽減する効果はあるのではないかと考えております。それから学生は面談を受けに個別に教員のところを訪ねて来ますので、相談できる教員がどこにいるかを確認できて、その後も相談しやすくなるということを考えています。その成果として、定期的な面談以外にも学生がやってきて各種の相談をするということがあり、有効に機能しているのではないかと考えております。学級教員とチューター教員と別々に当てていますので、学生の相談先が複数できるということも利点として考えております。

学科側から見ると、注意が必要な学生の早期発見につながっていること、状況確認ができて、教務系の窓口で集まる情報と連携ができるという点で、教務係とチューター教員とのきめ細かな情報共有につながっているだろうと考えております。必要に応じてチューター教員を通じ、個別の学生指導がスムーズに行える、ということもメリットかと思います。また、1 年生の面談記録を一括管理していることから、学生の網羅的な状況把握に役立っているという利点もございます。

ただし、注意が必要な学生があぶりだされたとして、そうした学生への対応という点に関しては、特によい方法があるわけではありません。教務係、学科、学生支援センター、保健管理センター、学級教員との複数で当たるといって、みなでよい方法をさぐっていきましょうということになります。不登校、不登校傾向の学生を見つけた場合には、学科で「不登校対応マニュアル」を作っておりますので、これに基づいて対応していくことにしています。

チューター制の課題

課題としましては、どうしてもチューター教員と学生との相性の問題が大なり小なり毎年生じます。これについては担当教員を変更することによって対応しています。基本的な問題点として、チューター教員の負担が増加していますし、教員間の取り組みにはどうしても温度差が生じる点も気になるところです。昨今増えておりますのが、面談すると連絡しても、学生から返信が来ないという問題です。教員側が苦労してなんとか面談日時を決めても、その時間に学生が来ないことも増えており、徒労感につながっているところです。それからチューター教員と学級教員との連携というところで不足があり、年次進行にともない担当教員が変わった時の申し送りがうまくできていない点も課題です。そもそも注意が必要な学生への対応が難しいということや、個人情報保護との関係から個々の学生の網羅的な情報共有がやりにくい、という点もございます。

農学部 of 学修支援

最後にチューター制以外に農学部で行っている学修支援についてご紹介しておきます。農学部でも毎年 6 月に成績優秀学生を表彰しております。生命環境農学科においては 2-4 年生が対象で、各学年 6 名程度を学部

長から表彰しています。共同獣医学科では各学年 1 名ずつを表彰しています。また、両学科とも 11 月には保護者説明会を開催しております。生命環境農学科では 3 年生の保護者を対象に、就職説明、個別面談を行っているところです。それから農学部では、学生が学外で自主的に活動していることがたくさんありますので、それをさらに奨励する目的もあって、オープンキャンパスで学生活動を紹介しています。地域連携活動のブースを設置して活動を広報するとともに、学生自身の励みにもしてもらっています。各教育コースでは、独自の取り組みとして、卒論発表会の表彰、海外実習の支援、収穫祭などを行っております。

駆け足になりました。以上、農学部からの紹介とさせていただきます。ありがとうございました。

質疑応答・意見交換

進行

ありがとうございました。それではここから、4 学部の報告を踏まえまして、質疑応答・意見交換に入りたいと思います。なお意見交換の司会については、高等教育開発センターの香川センター長にお願いしております。それではよろしくお願いいたします。

高等教育開発センター長・香川敬生

高等教育開発センターの香川です。まずフロアにお集まりの方々と、今日のご発表について、何か質問等がございましたら、お願いいたします。フロアから無ければ、オンライン参加者の方からも受け付けますが、いかがでしょうか。

とくに無いようでしたら、このまま意見交換に入らせていただきます。

各学部の取り組みをめぐって

最初に、4 学部それぞれ取り組みをご紹介いただきました。地域学部からは最近の学生の変化にとまどっておられる状況について、医学部はモチベーションの高い学生と、支援が必要な、底上げが必要な学生への対応について、ご紹介いただきました。このあたりは全学的に同じような状況かと思います。それから工学部から

は最後にキーワードとして教職連携の重要性が指摘され、農学部からはきめ細かいチューター制が行われていることが報告されました。

それぞれ重複するところもあろうかと思いますが、本日はせっかくの情報交換の機会ですので、これはうちでも取り入れてみたいとか、逆にうちでは難しそうだ、あるいはこういうところはもう少し伸ばせられるのではないかと、というようなことがありましたら、ご発言いただきたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

中曽（医学部）

他学部のお話を聞きまして、私どものところでちょっと足りないなと思いましたが、学生の上位層のモチベーションを上げるための表彰をかなりされていたので、我々ももう少しこま目にしてもいいのかなと思いました。それから我々も同じような思いをもっているのですが、やはり無反応な学生、つまり支援したくてもこちらの思いが全く響かない学生、響いてくれればやりがいもあるんですけども、そういった悩みを他の学部でもお持ちであるということが分かりました。そこは何か共通の良い仕組みがあれば、参考にさせていただければと思います。

香川

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

小野（工学部）

他の 3 学部のお話を聞きまして、非常に勉強になることが多くて、うちでも色々やってみたいというところがありました。とくに農学部のチューター制では是非取り入れてみたいと思ったのですが、共通の質問事項をきちんと用意しておいて、それをフォームを使って集計して共有しているというのは、継続的にできすし、色々な教員がやりやすい仕組みなので、自分の学科でもやってみるようには話してみようと思いました。

永松（農学部）

農学部はかなりがんばって細かいことをやっていると思いますが、今日のお話をうかがって、学生全体を同じように支援することには限界もございますので、何を重点的に行うかを考えて、支援対象の層を明確化するというのは、すごく参考になるお話だったと思います。今、農学部では、支援対象を抽出するといえます

か、把握することまではうまくできているんですけど、その先の支援というところで、もう少しやり方を工夫する必要があると感じた次第です。

香川

ありがとうございます。塩野谷先生はいかがですか。

塩野谷（地域学部）

本日、他学部の状況は大変参考になりました。ありがとうございました。地域学部ではチューター制というものはやっていませんけれども、主に1・2年生は学級教員、3・4年生はゼミ教員というかたちで、学生に近い教員が指導しています。状況として共通しているのは、連絡のつかない学生がいる、教員のなかには、どうしようもないので、学生のアパートまで行って、郵便受けを見てくる、これがあまりたまっていなければいいんだろうと判断する、そんな涙ぐましい努力もありまして、さらにきめ細かい学生対応をどうしてゆくか。それから教務係との連携は割合うまくいっているかなと思います。

それからもう一つ、地域学部の報告ではお話ししませんでしたけれども、学生支援センター、保健管理センターとの連携でも大変助けていただいています、このあたりもさらに強めていきたいと考えています。

学力不足の学生への対応をめぐって

香川

ありがとうございます。各学部、全体を通してうかがっていると、とくに医学部でお話がありましたけれども、モチベーションの高い学生と、底上げが必要な学生と、どこに焦点を当てて支援するのかを、明確に意識した対応が必要だということと、とくに底上げが必要な層に一生懸命に対応することで、逆にモチベーションが高い層に配慮が行き届かなくなるというところが、大学のなかでは共通しているところだと思います。

とくに底上げが必要な学生については、地域学部から要配慮の学生に関する指摘がありましたが、この点は今日はひとまず置いておきまして、むしろ学力的に大学の授業についていけない学生に関して、農学部の永松先生から、1年生の指導が非常に大事であるというご指摘がありました。入学前、入学時、1年生の間にきめ細かく指導しておけば、それによって2年次以降の

教員の負担も減ってくると思いますので、そのあたりについて、先行的に行われている農学部の永松先生から、ご苦労であるとか、これがポイントであるとか、ございませんか？

永松

なかなか思い着くことがないのですが、1年生の、とくに後期ですね、後期に崩れる学生が多いので、前期は勢いでできるんですけど、夏休みが終わった後、後期になって顕著に差がついてくる、というイメージはございまして、1年後期にどれだけ支援できるかが大きいかなと思っています。

香川

「夏休みの壁」があるということですかね。

永松

そうですね。大学に慣れてしまう、いい意味でも、悪い意味でも慣れてしまって、自分のペースが出来てしまう、ということなんじゃないかな。

香川

他学部はいかがでしょう。

中曽

医学部では実は先日、医師国家試験で不合格になる学生が、入学の時点、あるいは入学後のこの時点でどれくらいの成績帯にいるのか、調査したことがあるのですが、意外なことに、入学時の成績は全くとっていいほど、関係ございませんでした。普通は、ぎりぎりで大学に合格した学生が、医師国家試験も不合格になりやすいのではないかと考えるのですが、そうではなくて、どこかのタイミングで成績下位層のほうにシフトしてしまっている、ということが判明しました。それから今日お示した4年生と5年生で行う試験によって、要サポート的な立ち位置は確定してしまっていますので、我々の課題はもっと低い、早い学年で、どこかのタイミングで、基準と言いますか、これにひっかかったら要サポート群として分類する、早い時期でのピックアップが必要である、というのが共通の見解となっています。

配慮が必要な学生への対応をめぐって

香川

はい、ありがとうございます。小野先生いかがです

か。

小野

要配慮の学生は置いておきたいということだったので、その点は勘弁していただきたいのですが、私自身の経験ですと、工学部でという訳ではないですが、ちゃんと授業に出てきて、真面目に聞いているのになかなかうまく成績は伸びないという学生がいて、最近は積極的に配慮の申請をしていただけることになっていますが、その時の彼はそういうことだったのかな、と思うことがあります。そういうケースはなるべく1年生の段階で分かりますと、色々こちらも前向きに対応できるというのは大きいと思いますし、配慮申請にも色々あって、全てにちゃんと対応するというのはなかなか難しいところかもしれませんけれども、多くの場合は配慮することで他の学生にもかなりいい効果があると、気づくこともありますので、しっかりと配慮することは教員にとっても役に立っているのかなと思います。

香川

ありがとうございます。自分の学力をしっかりと把握できていない学生がいるということかもしれませんけれども、実は成績のほうもそうで、本学の場合は、高校の先生が教えてくださる教養基礎科目があるんですけども、その受講を勧めたいんだけど、本人にはその自覚がなくて、対応してくれない。もし1年生の段階で学力的な問題、それから学修支援が必要かどうか、という点をうまく理解してもらえるかどうか、という仕組みが入学時にあるといいのかなと、今お話をうかがって、印象をもちました。

今そういう話がでましたが、学生支援センターのお立場で、後藤先生から何かご意見ございませんか？

学生支援センター長・後藤知伸

後藤です。いつもお世話になっております。

今、要配慮者という話が出ましたが、現在全学で150名くらい、合理的配慮の申請を出しています。皆さん、多いと思われるのかも知れないんですけど、全学生で見ると、2.4%くらいなんです。鳥取大学は全国の他の大学に比べると、申請を出している学生は多いんですけども、先ほど申し上げたように2.4%という数値をどう考えるか、という議論もあろうかと思っています。

今日は皆さん、非常に底上げというところに注力していただいて、学生支援センターとしては非常にありがたいお話しでした。ただ、今日のテーマは「自ら学ぶ力の育成をめざして」というものであって、その点は、自分も研究者として一つの研究室を主催している身として、気になっているところで、この学生にどうやって自ら学ぶモチベーションを持たせてゆくか、という問題が、大学教育としては一番重要なんじゃないかなという気もしています。そういう問題が大多数の学生にとって課題なんじゃないかなと、思いますので、皆さんのご意見があったら是非、聞かせていただければと思います。

「自ら学ぶ」モチベーションをめぐる

香川

いい流れを作っていただきありがとうございます。

中曽

本日のスライドを作る際にもまさに同じことを指摘されまして、どうしても医学科はさらに底上げの程度が強いと思うんですけど、いかに上位層とか、潜在的にはモチベーションをもっている、チャンスがあれば声をあげたいという学生は必ずいるんですけども、なかなか拾い上げられていないというのが実情かと思っています。そういった点で言えば、表彰ですとか、HPなどで積極的に紹介するとか、そういったもので学生のモチベーションをあげて、きっかけになればいいかなと考えております。そのためには選択肢をもう少し増やさないといけないかなと思っておりまして、今のカリキュラムのなかでもそういったことができる枠が限られているんですけど、カリキュラム外のことも含めて、もう少し学生にアナウンスしてゆく必要があるかなと感じました。

永松

成績上位層、やる気のある学生の件は、割と救いがあるんですけど、我々が最近苦労している、というか気がついてきたのは、やりたいことがない、大学になんで入ったか分からない、鳥取大学にどうして進学してきたのかを説明できない、将来どうしたいかっていうことがとくに何もないです、という学生をどう指導していくかな、というのは少しありまして、先生方からもそ

ういう話は聞いたりしますので、そこをどうするか、何がひっかかるところかをみんなで考えることがあります。とくに解決策はまだ無いのですけれども、そういう学生をどう引き上げてゆくかが課題かなと思っています。

香川

ありがとうございます。

小野

個人的に考えているところなんですけれども、幸い私どもの卒業生で、社会で活躍されている方がたくさんおられます。在学生にも少しそういうところを、情報提供というか、身近に感じていただけるようなことをやってみたいと思っています。活躍されている方は、必ずしも優秀な学生であった方ばかりではないので、そういうところもあって、ただ皆さんどこかで、気持ちが変わって、努力されたからこそ、社会で活躍されているので、そういうところを知っていただいて、モチベーションをあげるきっかけになればいいかなあと、思っています。

香川

塩野谷先生、いかがですか？

塩野谷

地域学部では2つポイントがあると考えております。

1つ目は地域学部らしい特色と言っていると思いますけれども、「地域調査プロジェクト」という授業科目がございまして。少人数で地域に出て行って、フィールド、実際のところを見てくる、現場の話を聞いてくる、あるいは逆に来ていただいて、実態はどうなのか、話を聞く、こういうことと、大学のなかでの理論を中心とした学びとで、よい循環ができると、学生のモチベーションも上がるだろう、これが1点目でございます。

それからもう1つ大きなポイントとしては、やはり卒業研究が大きいかなと思います。とくに文化系がそうなのかと思いますけれども、誤解を恐れずに言えば、ある意味では学生が勝手にやりたいテーマを決める、そのなかで我々教員はできるだけの応援をして、そしてそれを深めてゆく、助言をしながら、そして自分の問題関心に基づいて探求してゆくということで、割合前向きに取り組んでくれている、それが普通ではないかなと思っています。これはもう卒業前の仕上げに近い

ところではございますけれども、これは非常に大きいのではないかと、思っております。

学修支援の在り方をめぐって

香川

最後に今日のテーマである、「学生の自ら学ぶ力」をどう伸ばしてゆくかというところに行き、大変ありがたく思っています。進行の不手際で時間が押し迫ってきていますけれども、山口理事のほうから一言いただきます。

山口理事

ありがとうございます。今日、4つの学部で、色々取り組まれていることを拝見してですね、私は非常に安心感を持ちました。鳥取大学はしっかりと学生教育を考えてやっておられるということで、安心しました。ただ4つの学部でも出ておりましたけれども、いわゆるこういう学生への学修支援となりますと、どうしても手間がかかったり、時間がかかる、教員の負担となる、職員も負担となる、というところがあって、ここは軽減していかないといけない。そうすると、今やっていることを、どこか端折っていかないといけない、ここの整理が今、求められているんだろうと思っています。ですから4つの学部が出てきて、これをきちんと整理していくとなると、ここは変な話、学生支援のなかで本当に困っている学生については、外部に委託してもいいんじゃないかとか、そんなところを考えて、大学として本当の意味でできることをやっていくことが大切かなと、組織としての対応としてはそういうところも考えないといけないと、常々思っています。

もう1つは、大学の先生というのはどうしても教えたがるのが欠点で、学生も教えてくれるからいい先生だ、ということになる、それは高校まではそうやって教わってきて、教科書の通りずっと学んできたらいよいよ、そういうふうにならいいんだって思うけど、「教えて欲しい」、「教えたい」ということでWinWinになっていますけど、やっぱり教えすぎっていうのは、今は駄目なんじゃないかなって思っていますので、よい教材を作って、それを提供して、学生に考えさせると、それこそ反転授業という訳ではありませんけど、自ら学ばざるを得なくなるような取り組みを今後は是非皆さ

ん、続けていってくれたらいいかなと思っています。

それで何が大切かというと、学生には愛をもってきちっと見てやる、つまずきそうならそこを見てやる、ということをやっていく必要があるかなと。僕も農学部出身なんですけれど、農学部で1年生の時に本当にちょっとしたことでつまずく、そこをちょっと声をかけてやって、これだけでも立ち直ってゆくと思います。僕も経験していますので、そういったところで最初の1年生のうちの支援をしっかりとやっていって、農学部は今までもずっとそういったことをやって来ていただいている、ありがたいと思っているところでございます。きめの細かいのが必ずしもいいとは限らないけれども、皆さんご存知だと思いますので、その辺をどうやっていくかということをもた皆さんとディスカッションしていただきながら、よりよい学修支援、自ら学ぶ力を育てていけるような教育をできたらいいなと、思っています。今後もひとつよろしく願いいたします。

香川

ありがとうございました。時間も超過していますので、最後に今日参加いただきました皆さまで、本日発表いただいた4先生方に拍手をもって感謝を示したいと思います。

〔付記〕

令和6年度全学FD・SD講演会は2024年12月13日（金）16:30－18:00に工学部講堂において実施され、Google Meetにより学内にライブ中継された。

閉会挨拶

進行

それでは閉会の挨拶を、引き続き香川センター長からお願いいたします。

香川

今日は本当にありがとうございました。最後は進行の勝手際でありまとまったものになりませんでしたけれど、今日の話のなかで、1つ出てこなかった、「eポートフォリオ」というものを私どもで展開しております、これを入学時にちゃんとしていただきますと、自分が何者であるかということに気づいて、成長してゆくための足がかりになっていただけないかなと、それからモチベーションの高い学生にはどんどん入力して活用していただきまして、これは表彰もしておりますので、さらにモチベーションを高めていただくツールとして、是非普及していただければと考えておりますので、今後とも学生の自ら学ぶ力の底上げについて、全学をもって進めていきたいと思っています。

進行

ありがとうございました。それでは以上をもちまして令和6年度全学FD・SD講演会は終了させていただきます。

（編集：高等教育開発センター教授 武田元有）

地域学部における学習支援の 現状と課題

鳥取大学地域学部
教務担当副学部長 塩野谷 斉

1

I. 地域学部における授業評価

概して、高評価。

一応、学生の満足度が高い授業が提供されている。

授業の(内容と)進め方(一般)

	R1年度前期		R6年度前期	
	地域学部	全学	地域学部	全学
授業目的・目標・成績評価方法の説明	4.6	4.4	4.4	4.4
授業の進め方	4.5	4.3	4.4	4.3
受講生の理解度を把握する工夫	4.5	4.3	4.3	4.3
受講生からの質問を受け付ける姿勢	4.5	4.4	4.3	4.3
授業内容における要点	4.5	4.3	4.3	4.3
シラバスの内容に基づいたか	4.5	4.4	4.4	4.4
教員の熱意	4.6	4.4	4.5	4.3

※評価項目は、R1年度による。R6年度は項目が変更になっているが、相当するものを表示。

2

一方、学生自身の取り組みについては課題。
授業の理解、学生自身の取り組み

	R1年度前期		R6年度前期	
	地域学部	全学	地域学部	全学
講義前にシラバスを熟読・理解	3.7	3.6	3.5	3.6
授業の内容を理解するために質問等	3.6	3.6	4	4
講義の理解に必要な自習	3.7	3.7	—	—
授業の内容の理解	4	3.8	4.1	4
授業の到達目標の達成	4	3.9	4.2	4.1
1回の授業あたりの予習			1.4	1.5
1回の授業あたりの復習			1.6	1.8

※評価項目は、R1年度による。R6年度は項目が変更になっているが、相当するものを表示。

※予習・復習は、1(30分未満)、2(30分以上1時間未満)、3(1時間以上2時間未満)、4(2時間以上3時間未満)、5(3時間以上)の平均。

3

II. 学生の実態

1. 要配慮学生

R3年前期

学部16名、大学院2名

R6年後期

学部20名、大学院1名

その他、面談・検討のうえ、配慮停止になった学生も。



必要な配慮は当然だが、個別対応には、授業を行う際に(事前準備を含めて)教員の負担も。

4

〈参考〉本学における合理的配慮(例)

肢体不自由のある学生

- ・試験時間の延長
- ・解答用紙の拡大
- ・板書撮影の許可

発達障がいのある学生

- ・使用教室の変更
- ・座席指定
- ・録音の許可
- ・板書撮影の許可
- ・イヤーマフの使用
- ・個別TAの配置
- ・定期的なカウンセリング

本学学生支援センターHPより
<http://www.st-support.adm.tottori-u.ac.jp/handicapped-about/index.html>

精神的な疾患に関しては、さらに緊急の対応も。
身体的な障がいについても。

〈例〉1人の学生のために、
同時オンラインのハイブリッド授業など。

5

要配慮でなくても、様々な学生。

履修上の躓き

想定外の？単位不足による
卒業延期



学生・保護者からの
クレーム

「私学では、事前にもっと親切に対応してくれた」

事故・事件

学生同士の関係



等々

保護者の理解と援助の不足
一方、「個人情報」によって、
事態を伝えきれないもどかしさ。

6

2. 学生の生活 奨学金需給状況

	R2,3,1	R6,3,1
給付奨学金	10	92
第一種奨学金	215	162
第二種奨学金	128	126
総計	353	380
未入数	320	302



学生は、経済的に
厳しい状況？

社会経験というより、
生活のための
アルバイト？



言い訳にされても困るが、

大学での学習に集中できない状況も。
どこまで予習・復習を求めてよいか、
迷う場合も。

7

III. 入試の変更

1. 入学志願者

地域学部地域学科

	R1年度	R2年度	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度
地域創造コース	299	234	192	405	167	332
人間形成コース	239	247	269	235	229	205
国際地域文化コース	236	187	242	496	153	266
計	774	668	703	1136	549	803

18歳人口の減少
志願者数の減少

対応として、(実質的な)入試の前倒し

教員の個別対応(相応の負担)は、今後も増える
ものと思われる。

8

特に、学力試験によらない場合、
(高等学校時代の成績を見るにしても、
高校間格差の問題)

一般に、大学志願者の学力は...？
特に読解力不足

〈参考〉
「東ロボくんプロジェクト」(2011～2016年)
複数の国公立大学、MARCHにも合格できる水準
しかし、AIは、東大二次試験は突破できず。
⇒必要なのは、問題文の理解

9

2. 学生の学力の変化と対応

本来、学生に求められる読解力が十分でない可能性

〈例〉

文献を指定して、事前に予習をさせる。

授業では、演習や議論を中心とする。

⇒アクティブ・ラーニング

(主体的・対話的で深い学び)

しかし、予習そのものが難しい場合も？

主体的・対話的であっても、深い学びには至らない可能性。

這い回る経験主義!?

“教科書で教える”ではなく、“教科書を教える”のでなければならぬかもしれない。

10

大学教員の仕事
教育、研究、社会貢献、学内行政

多忙化

忙しくても、
教育面については、
授業のレベルを落とさずに、
・学生一般への対応
・要配慮学生等への配慮
・(場合によっては)保護者対応等
同時にこなしていかなければならない。

地域学部には、
コマ数問題
(特に、特別支援、
保育、語学)
⇒世話教員としての
休日出勤など。

「私は忙しいからやらない」では済まされない。

11

IV.授業づくりに向けて

主体的、対話的...

保育者養成の立場から



12



深い学び

経験のみで
終わらせない
学び。
ここでは、
積木の歴史
特性
⇒選び方



学ぶ喜び

知と実践の融合

13

おわりに ～教員の責任～

- ① 自分が(教えるべき内容や方法)を学ぶ。
- ② 幼児・児童・生徒・学生をよく見る。
⇒正しく実態を捉える。 学生理解
- ③ ②を踏まえて、①を伝える、実践する。
- ④ どうしても自分の手に余る場合、他へ委ねる、
あるいは、共同で対処する。
⇒1人で抱え込まない。

特に、② ⇒ 学生は変わる。
学習能力、生活環境など

14

他大学の例から

某国立大学法学部長

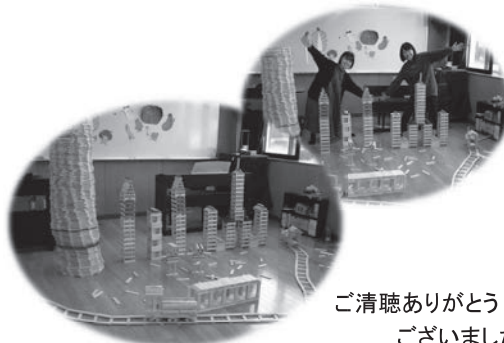
「以前は、学生の10人に1人が理解できればよいという感覚で授業をしていた。」

某私立大学(福祉系)准教授

着任後の大学側からの学生指導に関する説明を受けて、
(おそろおそろ)「それは、大学生を小学生のように扱ってほしいということでしょうか？」

(担当者は、目を輝かして)「そうです！ その通りです!!」

15



ご清聴ありがとう
ございました。

16

令和6年度 全学FD・SD講演会 ～自ら学ぶ力の育成をめざして～

医学部における学修支援 ～医学部教育の特殊性と課題～

医学部 病態解析医学講座 生化学分野
(教務担当 副学部長)
中曾 一裕

2024年12月13日(金)

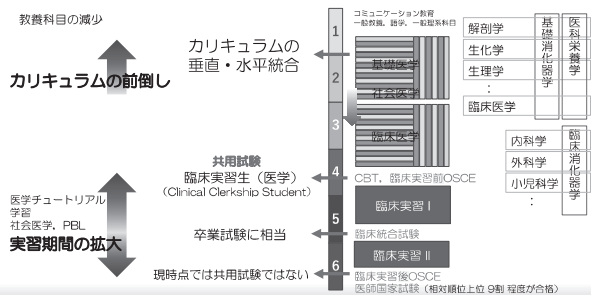
医学部3学科の概要 学部のみ紹介(大学院は除く)

医 学 部		
医学科	生命科学科	保健学科
医師養成 大部分が臨床医を目指す	研究者養成 医学・生物系研究者 関連企業(バイオ、製薬)	看護師養成(看護学) 臨床検査技師養成 (検査技術科学)
6年間(米子6)	4年間(湖山1, 米子3)	4年間(湖山1, 米子3)
共用試験 CBT 臨床実習前OSCE 臨床実習後OSCE	卒業研究/卒業論文 (研究室に配属)	卒業研究/卒業論文 (研究室に配属)
臨床統合試験 (卒業試験に相当)		
医師国家試験		看護師国家試験 臨床検査技師国家試験

医学部3学科の学習支援概要 学部のみ紹介(大学院は除く)

医 学 部		
医学科	生命科学科	保健学科
学生15人程度に対し 教員2名(基礎医学系、臨床医学系)	1学年40人に対し教員1名	40人程度に対し教員1名
6年間	4年間	4年間
国家試験合格率向上WG 個別フォロー	実習・卒業研究 所属教室 個別フォロー	実習・卒業研究 所属教室 個別フォロー
学部教育支援室・学務課・保健管理センター・(附属病院)		

鳥取大学医学部(医学科)カリキュラム



医学科カリキュラムの特殊性

- 6年間 タイムに組まれたカリキュラム
- 専門科目の全てが必修科目
- 学年毎に選級/留年の関門
- 医学教育モデルカリキュラム(医学教育指針)
医学教育分野別評価(国際基準への適合)
- 臨床実習前の関門(共用試験OSCE, CBT)
- 長期にわたる臨床実習(4年1月～6年10月)
- 臨床統合試験(卒業試験に相当)
- 医師国家試験 という共通の目標

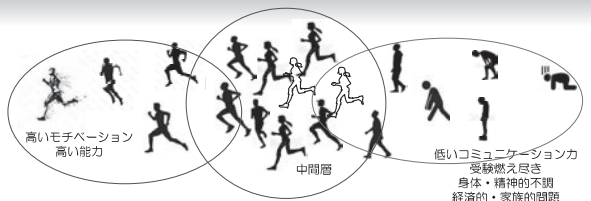
留年、孤立化、うつ等の精神的不調のリスクが高く、学修支援は「脱落者を出さない」ことを目指すことが多い。

医学科2年 授業時間配当表

科目	単位数	科目	単位数	科目	単位数	科目	単位数
基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120
基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120
基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120
基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120	基礎医学	120

医学科5年 授業時間配当表

科目	単位数	科目	単位数	科目	単位数	科目	単位数
臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120
臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120
臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120
臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120	臨床実習	120



学生に対する支援

全学生を対象とした学修支援

特定の学生を対象とした支援

- 例：高いモチベーションを持つ学生の能力向上のための支援
- 成績不振者の脱落回避のための支援



- 海外(東南アジア等)での医療活動
交流に参加(地味医療、感染症など)
- 研究室に入社し、研究に参加
- 様々な学外活動(ボランティアなど)



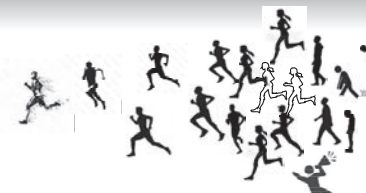
「出る杭プロジェクト」
医学科1年生3名がタイ、ベトナムの病院を見学



- 学修支援の方向は
- ・脱退させない(留年、孤立化させない、体調管理)
- ・医師国家試験合格を目指す

医学科学修支援の特徴

成績下位層をターゲットとした「底上げ型支援」が中心



医師国家試験合格ライン

強いコミュニケーション力
受容力・忍耐力
身体・精神的不調
経済的・家族的問題

学修支援の方向は
・脱落させない（留年、孤立化させない、体調管理）
・医師国家試験合格を目指す

医学科学修支援の特徴

成績下位層をターゲットとした「底上げ型支援」が中心

学部教育支援室

医学教育総合センター
医学教育支援部
学部教育支援室
大学院教育支援室
臨床研修支援部
卒後臨床研修センター
医療スタッフ研修センター
鳥取県地域医療支援センター
共同利用施設
シミュレーションセンター
臨床解剖教育研修センター

講義・臨床実習・試験に関する諸業務

成績不振学生・留年学生への対応
面談
科目責任者、チューター教員との連携
学務課（教務係・学生係）との連携

体調不良・精神的不調の学生への対応
面談
チューター教員との連携
保健管理センター/病院 との連携
学務課（教務係・学生係）との連携

求められる医学教育の量と質が増大し、
学務課とともに業務量が激増
マンパワー不足



基本となる全体支援体制
成績不振・心身の不調、困難行動
がある学生への個別対応

医学科 チューター制度

（メンター）

1グループ 15名前後の学生をグループ化
基礎医学系 1名・臨床医学系 1名（計2名）が 6年間通じて担当

年に1度程度の面談を推奨
奨学金推薦状、卒後臨床研修先への推薦など

交流会・食事会の推奨（今年度から資金援助あり）
新型コロナ流行を機に関係希薄化

担当教員の裁量に委ねられるため、関与度の差が生じる
（熱心 vs 無関心）



基本となる全体支援体制
成績不振・心身の不調、困難行動
がある学生への個別対応

医師国家試験合格率向上WG

共用試験CBT（4年次）
臨床総合試験（5年次）の成績と医師国家試験合格が相関

教員からの介入が好ましいと判断される学生をリストアップ
担当教員を配置

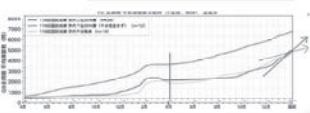
面談、メール等のコンタクト
（進捗状況確認、体調管理、悩み相談、励まし）

模擬試験受験料の補助と引き換えに、模擬業者を通じて
データを収集・分析 → 指導時の参考に

既卒生（国試験人）対策も含む
対策セミナーの実施（本年度は実施なし）



底上げのための支援



成績上位層

高モチベーション学生への働きかけの試み

研究室配属（医学科3年）
研究発表会における表彰
大学入門ゼミ（医学科1年）
発表会における表彰

カリキュラム外での活動（研究、課外活動）の推奨



高モチベーション学生への働きかけ



研究室インターンシップについてのご案内

大学卒業には、研究、習得、ワークの
経験、アルバイトなどの場が必要とされる。
研究・習得の場は研究室にあり、ワークの
経験はアルバイト先で得られる。研究
発表会に出席し、発表を行うことで、
研究・習得の場とワークの場を結びつける
ことができる。学生に必要とされるこれらの
経験を、研究室インターンシップで得る。
このシステムは、優秀な学生にのみ
適用される。研究発表会は、研究
発表会に出席し、発表を行うことで、
研究・習得の場とワークの場を結びつける
ことができる。学生に必要とされるこれらの
経験を、研究室インターンシップで得る。

医学科の特徴として

- 「医師国家試験合格」という **共通の目標** が存在。
- 求められる学修成果レベルがかなり高く、心身不調を訴える学生が増加傾向。
留年学生も一定数存在。
- 「脱落させない」「底上げ」など、成績下位層～何らかの心身不調のある学生への介入が大部分を占める（増加傾向）。

学修支援に関する課題

- 行っている支援が、いずれの学生層を対象としているのかを理解する。
- 成績上位層～中位層への「力を伸ばすための支援」が不十分
- 学修支援に必要なマンパワーの不足（教育支援室、学務課、保健管理センター）

工学部における学修支援

工学研究科工学専攻 副専攻長
小野 祐輔

工学部における学修支援

- 学級教員による個別面接
- 修得単位数の少ない学生の把握
- 保護者への成績送付
- 保護者説明会の開催
- 成績優秀学生の表彰
- 工学部育英基金
- 学科独自の取り組み

学級教員による個別指導

- 入学年ごとに学級教員を指定
 - 実際の運用は学科により異なる。
 - 学級教員の人数
 - 面談の頻度
 - 面談の対象者（全員、希望者、教員が指導の必要性を認める者）
 - 履修の手引きに学級教員の氏名を掲載
- 社会システム土木系学科の事例
 - 各入学年ごとに4名（土木工学P2名、社会経営P2名）
 - 前期開始時、後期開始時の年2回の面談は全員が対象
 - 学生からの要望や指導の必要性に応じて随時実施

修得単位の少ない学生の把握

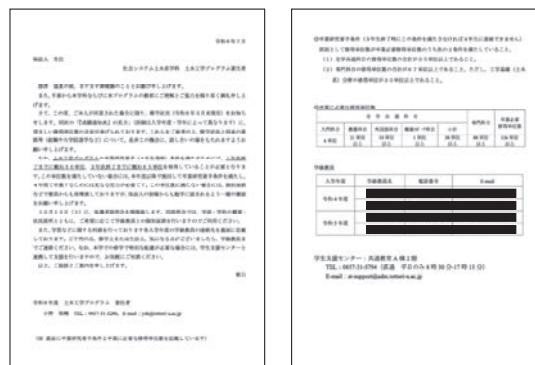
- 各学年で基準単位数を設定、下回る学生を工学部教務係が抽出
- 抽出された学生のリストを工学部学務委員（各学科2名）を通じて学科に通知・共有
- 学科で対応を検討し、実施
 - 社会システム土木系では学級教員に通知し面談時に指導

学年	前期終了時	後期終了時
1年	15単位未満	30単位未満
2年	45単位未満	65単位未満
3年	80単位未満	90単位未満
4年	95単位未満または卒業研究に着手していない学生、在籍可能期間が12月以下の学生	100単位未満

保護者への成績送付

- 前年度の成績を保護者に通知（郵送）
 - 本人の同意が得られたものに限る。
 - 入学時に同意書の提出を求めている。
 - 保護者説明会の開催案内と併せて送付（7月）

次のスライドは実際に送付した文書



保護者説明会の開催

- 風紋祭の開催中に保護者説明会と保護者面談を実施
 - 希望者を対象（原則、事前申し込み）
 - 工学部説明会（1h35m）
 - 学部紹介、保護者のための就職活動支援講演（マイナビ）
 - 学科説明会（0.5h～1h）

R6年度の参加状況

学科	保護者説明会申込数	申込人数（保護者）	数人面談の申込数
機械物理系学科	51	88	11
電気情報系学科	39	68	23
社会システム系学科	28	52	18
社会システム土木系学科	52	91	30
合計	170	299	82

席番号書番号カウント

成績優秀学生の表彰

- 工学部長表彰
 - 2年次、3年次で成績優秀な学生を2名ずつ選出して表彰
 - 4月に表彰式を実施
 - 賞状と副賞
 - 受賞者の氏名は学部Webページに掲載



R6年度表彰式の記念写真

工学部育英基金

- 対象者
 - 工学部、工学専攻、工学研究科に在籍する学生
- 給付目的及び内容
 - 大学院工学研究科博士後期課程に入学した学生の入学料及び授業料に要する経費の支援(国費留学生を除く)
 - 海外留学の渡航費用等に要する経費の支援
 - 海外留学の目的のための語学力向上及び習熟度の認定に要する経費の支援
 - その他工学部長が必要と認めた支援
- 財源
 - 工学部創立 50 周年記念事業委員会から付託された財産
 - 年間の給付金額は500万円程度を上限

学科独自の取り組み

- 資格試験の受験に対する助成（電気情報系）
 - 電気工事士、電気主任技術者など
- 欠席が多い学生情報の共有（化学バイオ系）
 - 学科教員で情報を共有し必要に応じて指導
- 卒業論文の優秀発表者の表彰（機械物理系）
- JABEE（社会システム土木系）
 - 土木工学プログラム（JABEE土木分野、2002年より）、社会経営工学プログラム（JABEE経営分野、2003年）の認定を得ている。
 - 改組前の電気電子工学科、知能情報工学科、生物応用工学科が過去に認定を得ており、経験が現在の教育カリキュラムに活かされている。

JABEE認定（社会システム土木系学科）

- 一般社団法人日本技術者教育認定機構（JABEE）が、技術者を育成する教育プログラムを「技術者に必要な知識と能力」「社会の要求水準」などの観点から審査する。
- JABEEの認定基準は、技術者教育認定の世界的枠組みであるワシントン協定などの考えに準拠しており、認定プログラムの技術者教育は国際的に同等であると認められる。
- 認定プログラムの修了生は、国家資格である技術士の第一次試験が免除される。

JABEEの認定基準

- 基準1：学習・教育到達目標の設定と公開
 - 1.1 自立した技術者像の設定と公開・周知
 - 1.2 学習・教育到達目標の設定と公開・周知
- 基準2：教育手段
 - 2.1 カリキュラム・ポリシーに基づく教育課程、科目の設計と開示
 - 2.2 シラバスに基づく教育の実施と主体的な学習の促進
 - 2.3 教員団、教育支援体制の整備と教育の実施
 - 2.4 アドミッション・ポリシーとそれに基づく学生の受け入れ
 - 2.5 教育環境及び学習支援環境の運用と開示

JABEEの認定基準

- 基準3：学習・教育到達目標の達成
 - 3.1 学習・教育到達目標の達成
 - 3.2 知識・能力観点から見た修了生の到達度点検
- 基準4：教育改善
 - 4.1 内部質保証システムの構成・実施と開示
 - 4.2 継続的改善

JABEEの「学習・教育到達目標」の項目

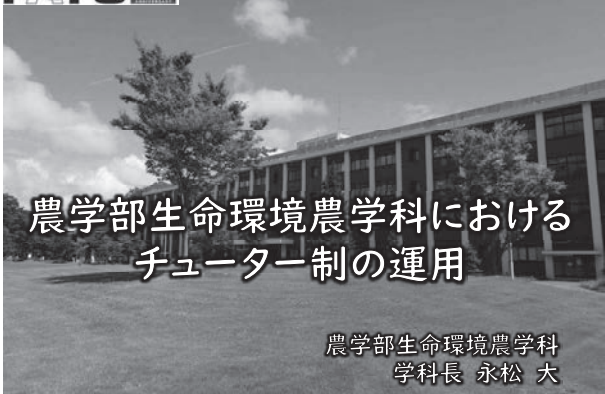
- a. 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養
- b. 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び技術者の社会に対する貢献と責任に関する理解
- c. 数学、自然科学及び情報技術に関する知識とそれらに応用する能力
- d. 当該分野において必要とされる専門的知識とそれらに応用する能力
- e. 種々の科学、技術及び情報を活用して社会の要求を解決するためのデザイン能力
- f. 論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力
- g. 自主的、継続的に学習する能力
- h. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力
- i. チームで仕事をするための能力

これらのすべての項目を満足する教育プログラムが認定を得られる。
各項目の具体的な実現方法は各教育プログラムに委ねられている。

工学部における学修支援

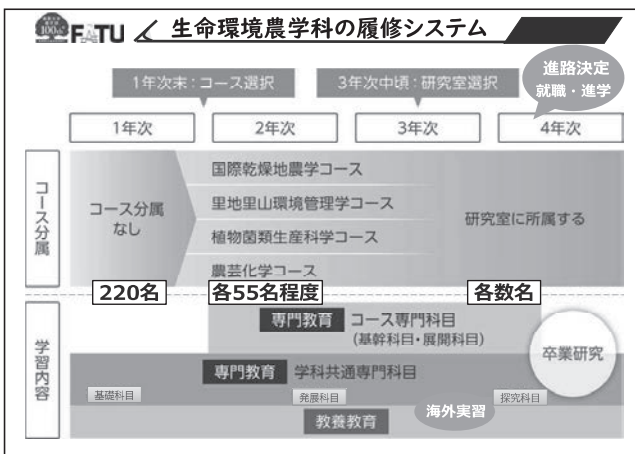
- 学級教員による個別面接
- 修得単位数の少ない学生の把握
- 保護者への成績送付
- 保護者説明会の開催
- 成績優秀学生の表彰
- 工学部育英基金
- 学科独自の取り組み

FATU 100 令和6年度 全学FD・SD 講演会 2024/12/13



農学部生命環境農学科における チューター制の運用

農学部生命環境農学科
学科長 永松 大



FATU 生命環境農学科の学修支援

1年次 2年次 3年次 4年次

コース分属なし

国際乾燥地農学コース
里地里山環境管理学コース
植物園類生産科学コース
農芸化学コース

研究室に所属する

220名 各55名程度 各数名

学級教員	番号順に 4名	分属後のコースごとに学年を受け持ち
チューター 教員 52名	各3-5名 入学前教育 考慮の上 学科長が指名	各3-5名 各コースで決定 (割り当て変更) 研究室教員が指導 研究室に所属しない 場合は、チューター教員

学級教員とチューター教員にできるだけ別教員をあてるダブルチューター制

FATU 生命環境農学科のチューター制度

チューター制の目的：

- ・学生との面談を通して修学面をきめ細かく指導、助言
- ・生活面、健康面、経済面等に関する相談も受ける
- ・学生をとりまく諸問題の早期発見や予防をめざす

主な役割：

1年次学生：各クォーターの履修登録期間に個人面談実施
修学面を中心に、生活、健康、経済面等を相談
成績公開後に単位修得状況等の確認と指導

2年次以降：各教育コースにて、必要に応じて個人面談

3年後期以降：研究室に所属しない学生はチューター継続、
月1回は修学状況等を確認、随時相談

欠席届の確認、休学、退学、復学等の相談窓口

FATU チューター制の運用

生命環境農学科におけるチューター制の運用：

- ・2005年（平成17年度）度から全面的に運用
- ・各科目の担当教員は、履修生の出欠状況を学務支援システムにできるだけ登録
- ・チューター教員は担当学生の学修状況を随時確認
- ・不登校傾向など諸問題の早期発見をめざす

チューター割り当て状況：

担当学生数：教授・5名、准教授・講師：4名、助教：3名
教員数減により、担当学生数が増加（負担増）

1年次の生活・学修習慣が特に重要

→ 1年生には定期的に面談を設定



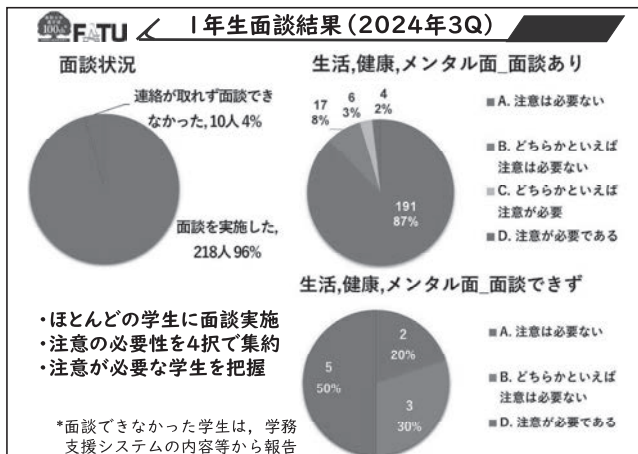
FATU 1年生への面談内容

各クォーターにおける1年生の面談内容：

1Q：入学満足度、履修状況、生活状況、困りごと
2Q：1Qの状況、2Qの履修登録、全学共通科目の履修確認
3Q：前期の単位修得状況、後期履修登録、夏休み後の生活状況
4Q：3Qの状況、コース分属希望の相談

例) 2024年度3Qチューター面談：

- ・期間：2024年9月17日～10月15日
- ・必ず聞いて欲しい項目を提示（上参照）
- ・面談結果を学科長が集約
- ・面接できなかった場合はその旨を報告

FATU チューター制の効果

学生から見たチューター制の利点

- ・4月当初の個人面談により、入学当初の不安を軽減
- ・相談できる教員の存在を確認できる
(定期的な面談以外にも学生から各種相談あり)
- ・相談先が複数できる(学級教員/チューター教員)

学科側からみたチューター制の利点

- ・注意が必要な学生の早期発見と状況確認、教務係との連携
- ・教務係、学科長とチューター教員とのきめ細かな情報共有
- ・チューター教員を通じた個別の学生指導
- ・1年生面談記録の一括管理による学生の網羅的な状況把握

注意が必要な学生への対応:

- ・教務係,学科,学生支援センター,保健管理センターの連携
- ・不登校学生対応マニュアル

チューター制や面談の課題:

- ・チューター教員と学生との相性(担当教員の変更)
- ・教員の負担増加,教員間のとりくみ温度差
- ・学生から返信なし,面談に非協力的な場合あり
- ・学級教員との連携,年次進行にともなう申し送り
- ・注意が必要な学生への対応の難しさ
- ・個人情報保護との関係(情報共有がされにくい)

- ・成績優秀学生の表彰
生命環境農学科は2-4年生対象,各学年6名程度
- ・保護者説明会の開催
生命環境農学科は3年生対象,就職説明,個別面談
- ・オープンキャンパスでの学生活動紹介
地域連携活動のブース設置
- ・コース独自の取り組み
卒論発表会表彰,海外実習支援,収穫祭...

